

階級・權力および國家に關するノート

岡 本 清 一

次の三つの章から成るこの覺書は、階級・權力および國家に關しての貧しい私見を、補註することもなく、また思索を重ねることも乏しきままにしるしものである。

- 一、社會階級および階級支配の諸問題
- 二、權力とその論理構造（以上本號）
- 三、權力の組織としての國家（次號）

原始氏族制社會のなから、階級と權力と國家とが誕生したことは、人類社會に遅しき發展を約束した事件であつた。まことにこれらを成立せしめたか否かによつて、人類は發展する社會と、未開のまゝに放任される社會とに分てられたのであつた。そしてさらに、その後の發展において、階級的支配關係およびその權力と國家とがいかにか徹底的に、新しい段階のものに向つて、揚棄せられていつたか、ということによつて、いわゆる前進的な社會（とくに西歐）と、停滯的な社會（とくにアジア）との區別が生じたのであつた。このことは階級と權力と國家とが、人類の社會的歴史的發展における決定的なファクターであることを告げるものであつて、われわれがこれらの問題にたいして、正しい認識をもつか否かによつて、われわれ自身が歴史に正しい位置を占めうるか

どうか、いいかえれば人類社會の發展に貢獻しうる人生觀、ないし世界觀を確立しうるか否かを決定せしめられるのである。

いうまでもなく階級と権力と國家という存在は、同時にかつ相關的に成立したものであり、さらにそれらは一つのものとして發展してきたものであるから、この三つの歴史的社會的範疇は、一體としてとらえられなければならないが、しかしここにおいては概念化のための必要から、一應、個別的に階級、権力、國家の順序にしたがつて論ずることにする。

第一章 社會階級および階級支配の諸問題

社會階級 *Social class* が歴史のうえに全き姿をあらわすまでには、それは古代的貴族社會の成立をまたねばならなかつた。すなわち、とくにギリシヤおよびローマにおいては、貴族たちが原初的過渡的國家體制としての原初的王制をうちたおして、彼等の階級支配、したがつて貴族の階級的権力と國家とが創出されたときをまつて、はじめて支配階級としての貴族と、奴隸に代表される古代的被支配階級とが、明確に對抗的に分裂したのであつた。そしてまた同じく中世的分裂的階級は、封建的領主制の成立によつて、近代の對抗的階級は、ブルジョアジによる階級支配の確立とともに端初するのである。このゆえにある階級の支配権力と、國家とが成立するに至るまでは、はやくも新しい對抗的階級としての、割れ目ができて、たといそれらはすでに「それ自身としての階級」ではありえても、いまだ對抗的な階級としての、すなわち階級的な自覺をもつた「自分自身のための階級」にまで、たがいに分裂するための條件が成立しなかつたのである。

歴史における對抗的な階級としては、古代においては貴族と奴隸、中世では領主と農奴、近代にあつてはブル

ジョアジとプロレタリアートのように、その時代を特徴づけるところの、したがって歴史の段階的形成を決定する階級と、その関係とがあらわれるが、しかしかく段階における階級は、對抗的なただ二つだけではなく、それ以外にもいくつかの階級層をかぞえることができる。古代にあつては貴族と奴隸とを對局として、その外に無産市民や貴族の從屬民 *clerus* や流民や、またローマにおける平民 *plebs* やギリシャの準奴隸 *Heiot* のこと、中世では領主と農奴のほか、僧侶、商人、手工業者等の社會集團 *Social group* が存立し、近代においてもブルジョアジとプロレタリアートとともに、農民・商工業者等々の諸階級層をみとめることができる。

このように歴史のかく段階には、つねに二つ以上の、いくつかの階級ないし階級層が、複雑にもたがいに自己を主張しあいつつ、しかもそれらはおのおのその國家的社會のちがいに應じて、階級事情とその力關係を異にしつつ存在しているのであるがしかし事實は、この多種多様のあらわれ方をしてゐる諸階級層が、みんな勝手な方向と要求とをもつてゐるのではなしに、結局において、その歴史段階における特質的な階級關係に、自己をむすびつけてゐるものであることがわかる。いいかえれば古代においては、そのもろもろの階級層が、奴隸的勞働の上に成立してゐる貴族的支配にむすびついてゐるか、あるいはそれを否認するかによつて、意識すると否とにかかわらず、奴隸的勞働階級と利害をひとしくしてゐるかどうか、また近代においては、彼の立場が結局においてブルジョアジの利益の側にあるか否か、というように分れざるをえないのである。そしてある歴史段階が、その末期になればなるほど、この二つの特徴的階級は、意識的な分裂化をとげ、決定的な段階においては、この兩極の中間にある中間層 *Mittelstand* または過渡的階級 *Ubergangsklasse* とよばれる諸階級もまた、そのいづれかに分解せざるをえなくなる。

ところが、同じ階級にぞくする者のすべてが、つねに同じ階級意識のもとに、鬭争的に結合するとはかぎらな

い。むろん彼等は究極的には、同じ階級的利害のもとに立つてはいるが、しかしその勞働の性質、彼の職場、家庭および社會環境、ないし教育のいかん等によつて、その階級的意識化の程度が異なる筈である。それ自身としては、被抑壓階級であつても、ある者はその意識の溷濁のゆえに、支配階級の利益に奉仕するかと思えば、また支配階級にぞくしていても、逆に被支配階級の利益と、その世界觀のために殉ずる者がある。しかしこのことは、人民がときの權力に反抗したり、また歴史を意識的に創造せんとしたりするすべての行爲が、階級關係のいかんにかかわりなく、行われるものであることを立證する材料とはならない。むしろ逆に歴史的創造の意識が、階級意識として、ふかく階級的利害にむすびついていることを、前提としてこそ、はじめて自分のそれ自身としての階級の立場をはなれて、對立的階級の側につくことが問題となりうるのであつて、もしこの前提がなければ、階級的利害から離れるとか、離れないとか、といったこと自體が問題にならない道理である。

階級と階級意識については、近代的階級よりは、古代ないし中世の階級および階級關係をみると、一そう焦點が明確になる。なぜならば古代および中世的階級は、深く身分 *estate* と結合して、階級關係がかたく固定せしめられていたからである。身分とは、いうまでもなく社會階級ではなく、人間がまだ廣く人格の尊嚴がみとめられない以前において、究極的には階級支配の必要にもとづいて、權力によつて生れながらに、法的に分てられたいくつかの人間的差等であつた。したがつて身分は位階 *Rank* のごとく支配階級的限定をもちつつ、しかし自由に上下しうるものではなく、それ自身固定性をもつたものであつたから、ときの權力者はこの身分の固定的性質を利用して、できるだけその階級的權力の安定化をはかろうとしたのであつた。かくて古代的身分は主として神にたいする關係においてきまり、中世のそれは武力を楨桿として成立したものであつたから、その固定性において、古代的身分は中世的身分よりもさらにつよく、また身分と社會階級とのむすびつきにおいてもまた古代

は中世よりもはるかに緊密であつた。このように身分關係は、歴史とともに次第に稀薄化して、ついに近代に入つて解消したのであるが、しかし中世においても身分が階級的支配關係の固定化と、階級的收奪のために果した役割は、はかりがたく大きく、被支配階級の暴發も、身分のちがいのために躊躇せしめられ、支配階級の彈壓は、そのためによりつよめられた。ところが身分は、つねに外見の表示をともなつていたので、彼が支配階級にぞくするか、また被支配階級にぞくするか、ということは誰にも一見して明瞭であつた。それだけに階級的意識も、身分意識としての限定性をもつていたので、身分的に支配階級の側にあるものが、被支配階級的立場に意識的に立つことは、きわめて困難にであつて、大鹽平八郎のごとき、まつたく稀有の存在であつた。また反對に被支配階級の側にあるものは、身分的に被支配階級としての自覺をもつたので、彼等は、あるときには無知と怯懦のゆえに、支配階級の利益を隸從的に肯定したとしても、それは決して階級的立場を超えての行爲ではなかつた。ところが近代においては、身分の解消によつて、階級的固定性が失われたので、職業ないし地位による立場の外に、支配・被支配の階級的立場などというものは、成立しないかのごとく考えられ易いのであるが、しかし事實は決してそうではなく、原則的には古代および中世的階級社會の場合とかわらない。

さてこのような對抗的階級關係を決定する究極的な條件は、すでに階級の成立が、生産手段の所有の歴史のうちにはみられているごとく、歴史のかく段階における對抗的階級の成立を決定する條件もまた、いうまでもなくそのときの支配的な生産手段の所有關係にあつた。そしてこの生産手段の所有・非所有の關係を基本線として、それにいろいろな社會關係的諸條件が附加されて、一見複雑な階級關係が現象するのであるが、しかし階級關係の本質は、まことに透明である。すなわち生産手段を所有している者のみが、他人の勞働を自分のために利用することが可能なのであり、生産手段を所有しない者は、その所有者に、自分自身をも所有させるか（古代奴隸的）、

その生産手段を利用させてもらう代償として、彼の勞働ないしその生産物を提供するか（中世農奴的）、あるいは自己の勞働を生産手段の所有者に賣り渡すか（近代勞働者的）することによつて、はじめて社會的生産に關與し、しかしてその命をつなぐことができるのである。このようにして生産手段を媒介として、ただ勞働する者と、他人の勞働を自己の利益のために組織する者とが、收奪、被收奪の關係において對抗的に、しかし分離しがたく結合する。すなわち、生産手段を所有することによつて支配階級たる者は、彼に對抗的な被支配階級の存在を前提としてこそ、はじめて支配階級たることが可能であり、また被支配階級は彼等の收奪者としての支配階級との對抗的結合を通じて、被支配階級としての自己を成立せしめるのである。ところが特定の段階における生産手段の所有・非所有の關係、すなわち階級的支配關係が、けつして單純でなく、きわめて複雑な現象を呈するもつとも大きな理由は、歴史段階的にちがつた生産手段の所有關係が、同時に複合的にあらわれることにある。すなわち新しい段階の生産手段の所有關係は、けつして古い段階の關係を全的に否定して、まづたく純粹なものとして成立するわけではないのであつて、そこには過去において支配的であつた關係が、多かれ少かれ殘影せしめられるとともに、さらに新しい生産手段の所有關係が、そのうちにおいて萌芽的に準備せられているからである。かくして階級關係の歴史段階的重複によつて、社會の階級的支配關係は、きわめて複雑なものとなり、特定の段階の階級社會において、その位置づけのむづかしい階級があらわれる。近代日本における地主と小作、ドイツにおけるユンカーと農民のごときこれである。しかしなおデッサンの多くの線のうちから、ただ一本の中心的な正しい線を見出しうるごとく、われわれはそのときの、支配的な生産手段の所有關係を標識として、その時代の階級關係をつかみ、これの生成と變更および没落のうちに、社會の基本的な運動をとらえようとするとともに、その可能を確信するのである。

かくして特定の生産手段の所有者としての支配階級が、歴史にあらわれるときには、彼等は必至的に特定の被支配階級をともなつて出現する。すなわちこの新しい支配階級が、古い支配階級を壓倒して、歴史に自己を明らかにしていく過程は、同時に生産手段を媒介として、彼等と矛盾的に結合している被支配階級の成立過程であつた。古代的貴族の階級的成立は、奴隸の階級としての形成を意味し、また中世的領主と農奴の成立は同時的であり、さらに近代ブルジョアジーが、形成されていくプロセスは、近代プロレタリアートの階級的固成の過程でもあつたのである。このような階級形成過程は、しかし、ゴム風船がふくらんでいくような、自己膨脹的なものはなしに、いうまでもなく従來の支配階級およびその支配關係との、たたかいにおける勝利の過程にほかならなかつた。すなわちかつての被支配階級のうちから、次の時代に支配階級たるべき新興の階級が、ときの支配階級の妨害を排して、自己をつくりあげつつ、彼等の生産手段とその方法が舊來のそれを壓倒するにつれて、この新興の階級は新しい支配階級としての位置につくのであつた。この究極的には新舊の支配階級の闘争にまで集約される階級闘争は、しかしたんなる階級と階級との利害闘争といった側面においてだけでなく、古い階級的支配關係と新しい支配關係との闘争、いかえれば新しい社會關係と古い社會關係との、さらにいえば新舊の權力と權力との、したがつてまた古い國家と新しい國家との闘争、といった文明史的性格においてとらえられうるのである。われわれはこのような歴史の根本的改變を要求する闘いを、革命の名において呼びならわしているのであるが、西歐史的には、それは三たび經驗せられ、古代的、中世的、近代の、三種の類型を異にする階級的支配關係が、歴史に記録されているのである。

いうまでもなく歴史における革命への要求は、つねに被抑壓階級によつて擔われ、それは新しい支配關係の創出をもつて、結論づけられたのであつたが、この革命に方向をあたえ、それを正しく歴史的に位置づけたもの

は、當然に新しい關係のもとに、生産を管理し、勞働力を收奪的に組織づけた新しい支配階級であつた。すなわち革命のすべての歴史的意義は、この支配階級によつて代表せられ、そしてまたこの革命によつて生みいだされた新しい歴史的社會關係は、必然的にその支配階級によつて、彼等の全運命をかけて、擁護せられたのであつた。古代的貴族階級の場合にも、中世的領主階級にあつても、また近代ブルジョアジーの場合もまた、このことは一致してかわらないのである。かくのごとく新興支配階級の成立當初における革命的前進性は、いうまでもなく彼等の擔う世界觀の前進性によつて表示せられた。古代貴族や中世的領主階級があらわれたときのことは、われわれにはすでにあまりにも遠いが、しかし近代ブルジョアジーが、彼等の世界觀を「自由・平等」のスローガンに集約して、歴史にそのかがやかしい姿をあらわしたときの印象は、なおわれわれにとつて新鮮である。そしてまた鎌倉武士が古代的貴族制の暗黒を排しつつ、衆望をあつめて出現したときの光彩を知るわれわれは、日本の封建制よりも、もつと典型的な姿において成立した西歐的封建的支配階級の、出現時における颯爽たる姿を想像することができる。さらに同じアナロジーをもつて、古代貴族の誕生における、その世界觀の清冽さを感じる。

このような新興の支配階級によつて、支えられた清新な世界觀は、いうまでもなく、そのときの社會的國家的構造と、むすびあうのであるが、もつとも鮮明には、それはときの道德意識の構成原理としてあらわれる。いかえれば古い世界觀によつて、形成されていた道德意識および道德秩序の崩壊につれて、その廢墟のうえに、新しい世界觀にもとづく道德意識と道德秩序とが成立するのがある。ところがときの道德意識によつて支えられている道德は、もろもろの個々の道德規範の單純なる集合體、もしくはただ孤立的な道德規範としてあるものではない。われわれはモーゼや孔子の昔から、殺すべからず、姦淫すべからず、さらに嘘言あるべからず等々の、多

くの道德規範をもつてゐるが、しかしこれらの無數の個別的な道德規範は、たんなる個別性において、また機械的な集合状態においてあるものではなかつた。すわちそれは一個の體系的統一として存在し、その體系的統一の内における個別であつた。それゆゑにこそ、われわれは道德を統一性において、これを實踐的にとらえうるのであつた。したがつてもしある道德規範が、その時代の體系の中にはいり得ないで個別的單一性においてのみあらざれば、それは道德意識においてとらえうるもの、すなわち道德規範たることすら不可能であるといわねばならぬ。たとえば刑法が、各個ばらばらの刑法規範の寄せ集めではなく、一個の體系としてあるかぎりにおいて、この體系の中に、はいりえないものは、たとい刑法規範のごとくあつても、それは刑法として成立しないのと同じである。かくてわれわれは刑法というとき、これを體系的一體として把握しているごとく、道德というときも、意識する与否にかかわらず、やはりこれを體系的に一體のものとしてとらえているのである。この點はまづ明確に承認されなければならない。ところが道德の體系的統一性は、それみづからの力によつて成立的に可能なのではない。あたかも刑法に體系をあたえるものが國家における權力であるごとく、道德もまた他の者によつて體系づけられなければならぬ道理である。では道德に體系的統一性をあたえるものは何か。——それはそのときの道德の體系的構成原理となつてゐる世界觀である。したがつてある特定の時代にあつては、その道德規範がそのときの世界觀に合致するかぎりにおいて、それは道德性をもつのであつて、もしこの世界觀にそむくならば、たといそれが曾つていかに有力な道德規範でありえたとしても、それは新しい道德體系の外に放逐されて、道德としての拘束力をもちえなくなるのである。かくて世界觀は、道德に體系的統一性をあたえる原理となり、また個々の道德規範に、その體系内における位置づけをなす規準力として働く。たとえば封建的世界觀にもとづく封建的道德體系のうちにおいては、道德規範「報恩」の位置は、近代的世界觀にもとづく近代の道德體系にお

ける「人間的自由と平等」に比せらるべきほどの、そのときの道德體系のうちにあつて、中核的な重要さをもつていたが、しかし近代的道德體系のもとにおいては「報恩」の位置づけが、すでに昔日の比を失つてゐるときである。

道德はかくのごとく、體系としてとらえるべきものであるかぎりにおいて、それはそれ自體としての、歴史的完結性をもつてゐることが理解できる。道德の歴史的完結性 *Completeness* とは、その完全性 *Perfection* の意味ではなく、それ自體としての獨立性ないし自存性というほどの意味であつて、比喩的にいえば人間の社會的な進歩が父から子に、子から孫にというように世代的に發展的に繼承されつつ、しかし父と子と孫とは、それぞれ一個の人格としての完結性をもつてゐるといふことである。したがつて他のすべての社會的なものと同一く、道德もまた封建的道德、近代的道德というように歴史的性質をもちつつ、父から子にさらに孫にというのと同じように發展してゐるのである。

そしてその發展的繼承は、いふまでもなく古きものにたいする否定的發展を意味するところの揚棄 *aufheben* の仕方に従うのであつて、たとい古い道德と新しい道德が、ともに殺すべからず、盗むべからず等々の、萬古不易とみえる道德規範の多くを共通に含んでゐるとしても、古い道德體系と新しい道德體系は、古き世界觀と新しき世界觀との相剋につれて、必至的に歴史的にたたかうのである。

この場合に恩に報いるべし、人を愛すべし等の個々の道德規範が時代を超えて現象的に同じであつたとしても、それは道德と道德との歴史的闘争を緩和する力にはならない。なぜならばこれらの個々の道德規範は、かく歴史段階の道德體系の中にあつて、その位置づけが歴史的に變化するとともに、規範の要求する内容もまた歴史的に異つてくるからである。たとえば主人の子供の命を助けるために、自分の子供を殺すことが、「報恩」を中心と

する封建的道德體系のもとにおいては、道德的行爲として高く評價せられ得たとしても、近代の道德體系のもとにおいては、それは何等の評價をうけるにも價しないのみならず、むしろ沒道德的行爲として斥けられるのである。かくして階級闘争は道德と道德との闘争としてあらわれ、新興の階級は、古い道德體系の構成者としての、今までの支配階級にたいして、新しい道德體系を樹立するものとして登場してくるのである。かくのごとくにして、階級支配の交替とともに人類の道德意識と道德體系とは前進していく。そして古い道德體系における個々の道德規範のうちなお亡びないものは、歴史的に新しい體系のうちにおいて、さらにかがやかしく甦るのである。

このようにして特定の支配階級は、かならず新しい世界觀、したがつて新しい道德體系を擔つて出現する。いかえれば新しい體系の道德を自らの内において體現したところのものが、つぎの時代において支配階級たりうるのであつて、彼等の支配階級としての成立當初における輝かしさは、實にこの新しい體系の道德をうちたてる者としての魅力に出づるものにほかならなかつた。そしてこの新しい道德をうちたてる者としての革命的な新興階級は、みづから安んじてその道德のために死し、またのちに彼等の隷従階級たるべきものもまた、そのために死を決して従つたのである。しかしてやがて、彼等が勝利してその善とするところのものを、その社會のすべての成員が善とし、その斥けるところのものが、すべてによつて斥けられるにいたつて、彼等になう世界觀と道德の優越が完成するのである。このことはまた直ちに彼等が支配的抑壓階級として、完成的に確立されることを意味するのである。この二つのことは歴史的に全く同時に、そして不可分の關係において進行する。

かくして新興の支配階級は、新しい體系の道德を、うちたてる者としてあらわれると同時に、一方においては、生産手段の所有を通じて、自らのために組織した被支配階級にたいする、收奪者としての自己自身をあらわす。すなわち新しい道德と新しい收奪行爲の完成の歴史的使命を、負うものとしての支配階級は、したがつてこ

の收奪性と道德性という全く矛盾的な側面を、ともに不可缺の構造的契機として、彼等自身のうちに統一的に體現していることになるのである。それはこの收奪性と道德性との、いづれのファクターを缺いても、彼等は支配階級として成立しえないことを意味するのであつて、もし彼等が自らになうべきすぐれた新しい道德體系をうちたてえないとすれば、ときの支配階級に優越して生産手段と勞働力とを、彼等自身のために組織する資格をつくりえないし、またその道德體系の崩壊は、必至的に支配階級としての彼等の破滅を結果することになる。そしてまた彼らの道德體系は、彼らになう生産手段の所有關係、すなわち收奪關係を社會的基盤とせずしては存在しえないのである。かくして階級支配の矛盾的構造的契機としての收奪性と道德性とは、論理的にはたがいに矛盾しつつ、しかも必至的な統一性を保つて、そのときの生産關係したがつて階級的支配關係、いかえればその階級社會を安定づけるためにはたらく。そこでもしわれわれが道德を觀念の世界から解放して、これを階級的現實の世界につれ戻すならば、それがいかに永遠不滅にして、しかもすべてに超越した世界をもつかのごとく見えるとしても、階級社會における體系としての道德が、必至的に階級的性格と運命ともつものであることは否定しえないであろう。古代における道德體系が、貴族階級の支配と不可分の結びつきをしめし、中世のそれが封建領主の收奪を可能にし、また自由を中核とする近代的道德體系が、ブルジョアジーの支配と結合している事實には、われわれの疑いをいれる餘地がない。かくのごとく道德が階級的性格をもつものであつたればこそ、支配階級が歴史段階的に發展轉化し來るにつれて、道德もまた彼等に擔われて、古い道德とたたかいつつ、發展しえたのであつた。したがつて道德が階級的であるということは、階級支配のそれが、階級支配を成立せしめているがゆえであつて、決して道德が支配階級によつて、利用せられているからではない。もし支配階級が、そのときの道德を自己に都合よく解釋して、用いるがゆえにこそ、それが階級的であるとする素朴な巷間の論理にしたがうなら

ば、それはむしろ逆に道德の超階級性を立證することにならぬ。なぜならば道德が、支配階級によつて、利用せられるものであるとすれば、それはかの階級の外に存在しなければならぬ筈であるからである。

人類の歴史において階級的支配關係が生みいだされたということは、そのことによつて人類史に發展が約束せられたという意味において、それはまことに貴重な事件であつた。そして新しい階級的支配關係が古き支配にたいする戦いの中から誕生するにつれて、人類は次第に解放と進歩のプロセスを辿つていつたのであつたが、しかしすべての人類にとつての手段的存在が、それ自身を不要ならしめるために出現したものであるということができるのである。すなわち古代、中世、近代といった特定の階級的支配關係が、それぞれの歴史段階的限界をもつて消滅していくごとく、階級的支配一般も、やがて地上からその姿を消していくであらうことは、今日の社會科學が、大地を指す正確さをもつて、斷定しているところである。だが階級支配は、健康無比の若者が、戦場で殺されるように、忽然として消え去つていくのではなしに、恰も人間の自然死のごとく、徐々に決定的瞬間にむかつて衰えていくのである。すなわち古代から中世への階級的支配關係の轉化は、いうまでもなく明らかに、階級的支配の酷薄さを緩和し、人間的隷從關係の緊縛性をゆるめて、どれほどか人間的自由の増大を結果したのであり、またこのことは近代においては、まことに素晴らしい躍進をしめた。むしろ近代プロレタリアートといえども依然として被收奪状態のもとにあるのであるが、しかしそれはすでに古代や中世の被收奪階級に比すべくもなく自由である。このようなイデオロギー的には、ヒューマニズムの成長ないし個人の人格性の普遍的擴大という形でとらえられる階級的隷從關係の揚棄の方向は、政治および經濟ないし社會の一般的制度的表現をともなつて、確實化せしめられていつたのであつた。そしてそれはついに、資本主義的階級支配を最後として、そこにおいてはもはや

人間の收奪にもとづく、階級關係の存在しない歴史段階が創造され、人間の階級支配からの完成的な解放、すなわち完全な人間性の恢復がおこなわれるのである。では、このような階級支配の消滅化のプロセスは、いかにして進行するか。これはわれわれが階級を論ずるにあたつて、最後にとりあげなければならぬ問題である。

それはすでにみたごとく、新しく勃興してきた階級が、その清新なる世界觀を擔つて登場してくるときの鮮明さは、歴史の革命的段階を、かがやかく彩るのであるが、しかしこの階級の手に權力がにぎられ、新しい國家が組織されて、彼等が支配階級として形成されたと、それはまだ前の歴史的段階の殘存的勢力にたいしては、前進性を主張しうるとしても、もはや歴史に對する前進的役割を失うのがつねである。このように新興階級が、その支配を確立するとともに、反動化していく事實は、歴史を推進せしめる力が、つねに被支配的人民の側にあつて、これを物語るのである。いいかえれば歴史を發展せしめる力は、そのときの人間的一般的狀態を改善しようとするところの、いわば現状にたいする不滿にほかならないが、このような不滿は、階級收奪的社會においては、被收奪的人民によつて前進的に代表され、支配的階級の場合には、彼等は總じてその要求を、收奪手段の質的改良ないし收奪強化および被收奪者の量的擴大によつて満たそうとする。かくして支配階級は、つねにその社會の狀態をそのまゝ、維持することを利益とするに反して、被支配的人民はこれを變革しようとするかぎりにおいて、その生みいだされた新しい世界觀も、支配階級の手中においては、石地におちた種子のごとく、成長する條件を見出しえないにもかかわらず、逆にそれは被抑壓人民の力によつて、成長せしめられるのである。古代ローマにおいて貴族たちが、原初的王制の打倒のうちに獲得した前進性は、しかし支配階級としての貴族によつてではなく、賤民、奴隸ないし屬領民の反抗をつうじて、制度的には會議制の發展として成長せしめられ、また近代ブルジョアジーのになつた自由平等主義の世界觀のもつ歴史的價值は、實に近代プロレタリアートの闘争をつう

じて豊麗ならしめられたのであつた。われわれは一八一五年から四五年にいたるイギリスのチャーチスト・ムーヴメントにはじまる労働階級の闘争によつてこそ、はじめて政治の局面においては、普通選挙および婦人参政権の實現をみた事實を、卒直にかえりみなければならぬ。日本においては必ずしも労働階級の闘争を主核として、近代的世界觀の成長がもたらされなかつたが、これは日本がおくれてすすんだために外國への模倣的追隨を必要としたからにほかならなかつたのである。

かくして被支配的人民の闘争をつうじて、そのときの支配階級になう世界觀の歴史的意義が完うせしめられたのであるが、しかし被支配階級、はかの支配階級の世界觀的立場に立つて、それを成長せしめたのではなく、むしろ逆にこの世界觀と發展的に對立する立場に立つて、支配階級の世界觀における前進的なものを引き出してこれを成長せしめていつたのである。すなわちたとえば近代ブルジョア的世界觀は、プロレタリアートに擔われた社會主義の世界觀的立場に立つ闘争に導かれてこそ、それははじめて正しいそれ自身の發展の方向を見出していくことができたのであつた。かくして支配階級は被支配階級の闘争に抵抗しつつ、むしろ抵抗の必要のために、皮肉にも自らの世界觀の實踐的成長を餘儀なくせしめられたのであつたが、しかしこの特定の世界觀の成長には、おのづからそこに歴史的限界があつた。すなわちその前進的な性格を、さらに成長せしめていけば、この世界觀は、ついにそれ自身を否定して、自己崩壊すべき段階に到着しなければならなかつたのである。ここにおいて史上のもろもろの支配階級は、この最後の一線を護つてたかつたが、しかしその世界觀はそれをまもらうとする支配階級とともに、人類史の要請のまえに必至的にその敗北が宣告せられた。近代ブルジョアジーになわれた世界觀もまた、いまやこの段階に到達しているとかがえられるのである。

このようにして被支配的人民の力によつて、古き世界觀とそれにもとづく具體的體制が崩壊せしめられ、そし

て被抑壓階級のうちから、つぎつぎに歴史をになう新興の支配階級が誕生して、そしてそのもとに新しい被收奪階級が、形成せられていつたのであるが、しかし資本主義のもとにおける労働階級による闘争は、新しい生産手段の所有者としての新興支配階級を、作り上げるべき歴史的目的をおびるものでなく、周知のごとく、それが生産手段の私有の排絶せられた世界を、歴史にもとめていこうとする目的をもつものであるかぎり、この闘争はもはや新しい生産手段の所有者としての支配階級をうみいださないのである。かくして支配階級のありえない世界において、被支配階級の存在しえないことはいうまでもないことであつて、五千年に近く、人類史を特徴づけてきた階級支配は、階級支配それ自身の論理にもとづいて、その歴史的使命を果しうるのである。そして階級闘争によつて前進せしめられた人類の前史は、このようにして終結し、ここから古い胎盤をすてた新しい歴史がはじめて誕生する。

第二章 権力とその論理構造

権力という一見、とらえがたい存在事實を、いかに認識するかという問題は、政治學のアルファであり、オメガであつて、政治學における分岐と對立も、すべてこの権力論をめぐつて展開せられているといえよう。そしてまた今日の社會の問題のすべてが、結局において、政治の問題としてあらわれるごとく、いかなる分野の社會科學も、究極するところ権力の問題に、行きついてしまうのである。ところがこの権力の現象と本質にたいする認識は、學問としての長い歴史をもつにもかかわらず、いまだプリミティヴな段階をいでないのであつて、無數の問題が未解決のままに放置されているといえるのである。したがつて権力の構造や、その運動變化の論理を明らかにしつつ、その本質に迫まる仕事は、今日の諸社會科學の停滯を打通するカギを提供するものといえるのである。

る。

さて權力事實に立ち向うにさいして、すでに權力も階級や國家と同時に、かつ相關的に成立したものとなし、さらに權力について明らかにする前提として、階級支配の問題を論じたことによつて、小稿が權力を階級的支配力と、パラレルに把握しようとしていることは、いうまでもなく明瞭であるが、しかし言葉の平板な意味での階級的支配力とは、そのままではいまだ權力とは稱しがたいのである。むろんある階級の支配階級としての自覺的形成は、すでにのべたごとく、その階級が權力を創造することによつて、はじめて可能なのであるから、階級的支配力というアイディアの中には、それが權力にまで昇華したものとしての意味が、どれほどかふくまれているのであるが、しかし言葉の嚴密な意味において、階級的支配力を權力と稱しうるためには、支配階級にぞくする者のもつ個別的な支配力が、一つに組織づけられたものとして現われる必要があるのである。すなわち階級的支配力という場合には、それが個々の生産手段の所有者たちの、雑多な要求にもとづく抑壓力のすべてから獨立したものとしての意義をあらわすまでには至らないが、一旦それが組織化の關門を通過すると、公權力としての、それ自身の獨立した要請と運動の軌道をもつことになる。このような支配階級にぞくする個々の者から一應超越したものとしての權力は、それ自身は支配階級の抑壓でありながら支配階級にぞくする者をも拘束するところの強制力として働くのである。したがつて權力は個別的な支配力の總和ではなく、それらと次元を異にした強制力であるから、その權力のもとにある個々人は多かれ少かれ權力との對立關係にはいる。すなわち被抑壓階級にぞくする者が、ときの權力の否定のうえに、自分たちの新しい權力をうちたてようとする方向において既存の權力に對立することはいうまでもないが、支配階級にある者もまた、そのときの權力を究極的には自分たちの利益に調印するものとして、被支配階級の反抗にたいしては、極力その公權力を擁護しつつ、しかし自分自身は、で

きるだけ權力による拘束をのがれて、その外において自由に利益を圖りうる世界を築こうとするのである。この場合にときの權力は、被支配階級による反抗を抑壓するとともに、また個々の階級的收奪者の行きすぎをも抑制して、その社會の階級的支配秩序の安定化のために作用するが、このような權力の働きのゆえに、われわれは權力および權力による組織としての國家を、あたかも特定階級から獨立したところの、超階級的な存在であるかのごとく誤り解し易いのである。そしてこの誤謬にもとづいて、權力ないし國家は階級對立の外にあつて、もろもろの社會的な利害を調整することを、その任務としていゝた目的理論が形成せられる。

かくのごとき權力ないし國家を、本質的に超階級的な存在であるとする理論によれば、たとい權力の行使にあつて、支配階級的偏向や不公正があつたとしても、それは必然的なものでなくて、所詮、偶然的なものであると解せられるのである。だからもし能力ある有徳の人物が、權力の掌に立つならば、彼によつて全く公正な政治が行われうることになる。プラトンの哲人政治への憧憬も、孔子の政治的理想主義も、明らかにこれであつて、この立場は古代以來、近代にいたるまで一貫して、政治學における正統派をなしているのである。たとえばハールド・ラスキのごとき、たとい彼が政治の支配階級的偏向を指摘するとしても、彼もまた結局政治における支配階級的不公正は、これを除去することが可能であると考えたのである。したがつて從來のほとんどすべての學說に共通するオプティミズムの立場は、權力や政治や國家を階級的にとらえようとしないので、結局それらの永遠不滅を信じかつ主張する理論の制作者としてあらわれるのである。

ところがこれに反して、權力や國家を、暴力的支配をもつて人間の自由を奪うところの、無用かつ有害なる存在であるとする立場がある。これは多かれ少かれ、いわゆるアナキズムに共通する立場であるが、しかしアナキズムが、周知のごとく階級的支配ないし權力、政治および國家の廢止をつよく主張するのは、それらが歴史

的必然性をもつて消滅するといふのでなしに、階級や歴史とは無關係に、ただ悪い存在であるから廢止すべし、
というにある。かくのごとくアナキズムにおける權力や國家にたいするペシミズムは、在來の正統主義的なオ
プティミズムとともに政治の理論における兩極端を構成しているのであつて、これらの理論によれば權力や國家
は、究極するところ善なるものであるか、もしくは惡なるものでしかないのである。このような價値的な立場
が、はるか科學以前のものであることはいうまでもない。

ところがこれらのオースドキシズムもアナキズムも、ともに批判さるべき理論ではあるが、しかしいささか
も權力の本質にふれていないというわけではない。それらはつぎにのべるがごとき、權力のもつ二つの基本的構
造的契機のいづれかに、別々に關連をもつていたのであつて、この關連性のゆえにこそ、これらの理論もまた多
くの信奉者をもちえたのであつた。權力の構造的契機にかんしては、權力と階級的支配力とをパラレルに把握す
る立場に立つかぎり、前節でふれたように、階級的支配における二つの矛盾的構造的契機としての、收奪性と道
徳性とが、やはり權力の場合にあつてもまた同じく、その構造的ファクターになつてゐることを承認しなけれ
ばならぬのである。すなわち階級的支配力としての權力は、つねに必至的に階級收奪のための力、すなわち暴力
として、あらわれざるをえないのであつて、いかに有徳の君子が爲政者となつても、權力のもつ暴力性(收奪性)
を剝奪することは、絶對的に不可能であるといわなければならない。

權力が階級的收奪に應じない者を彈壓し、これに反抗する者を獄に投じ、あるいは死刑に處する力として働ら
く場合には、その暴力的性格は、いうまでもなく明瞭であるが、しかしたといそれが、露ネーキッド・パワー骨な力としてあ
らわれなくても、その強制力が階級的收奪のために行使せられるかぎり、それは暴力性を本質的にそなえている
のであつて、それがネーキッド・パワーとしてあらわれるかどうかは、ただ程度の差にすぎないのである。だか

ら、哲人ないし有徳者が、政治の掌に立つた場合には、その徳力をもつて権力現象を溫和ならしめることができるであらうが、しかしその收奪性（暴力性）をうばうことはできないのである。

かくのごとく階級的收奪のための組織的強制力としての権力は、本質的に暴力的性格をもつのであるが、それと同時に、権力は必至的に道徳的性格をおびてあらわれる。この権力の道徳性は、しかし、権力の暴力的核心を外側から偽装しているところの、ゴマ化しのためのものと解すべきものではなく、社會的強制力一般、したがって権力にもまた固有するところのものにほかならぬのである。すなわち社會的強制は、それがいかなるものであつても、ときの社會的一般的道徳意識によつて支えられていなければ、成立しないのであつて、もしかりに、この道徳意識に反して、強制が行われたとすれば、その強制力は、瞬時にして潰え去つてしまふのがつねである。したがつて権力もまた、たといそれが階級的收奪のための強制力であるとしても、それはときの道徳意識によつて支えられていなければ、権力として成立しえない筈であるから、権力は必ず、自ら社會的道徳的支持をうけるに價する道徳性を、それ自身に固有せしめていなければならぬ。かくして権力の存在するところ、必らずどれほどか権力にたいする道徳的支持があり、また権力は自ら自分を維持するに都合よく、社會の道徳とその意識を創り上げるのである。権力が變るたびに、そのもとにある社會の道徳が大きく變化せしめられる事實は、すでにわれわれの短い人生體驗によつてすら明らかである。

この権力における道徳性は、しかし階級的支配力における場合のごとく善惡の範疇においてでなく、その権力の具體的な發現の仕方が正しいかどうか、すなわち社會的正義 *Justice* に合致しているかどうか、というように判斷されるのであるから、それは法的なニュアンスをもつところの権力の正當性 *Legitimity* と呼び換えらるべきである。いいかえればこれは権力が個々の階級的優越者をも拘束する公的な、したがつて法的な性格をおびる

ことのゆえに當然であるが、しかし權力の正當性とは、いわゆる權力の合法性の意味であるというよりは、むしろ正義性の意味に解すべきである。この權力の正當性（道德性）は、しかしいうまでもなく單獨に權力に固有しているものではなく、すでにのべたごとく、それはまた權力に固有する暴力性（收奪性）と、必至的に關連し合つて、權力の基本的な構造的契機をなしているのである。すなわち權力の暴力性は、その權力が社會的に正當なりとせられていてこそ、はじめてその成立が可能であり、また必至的に暴力性を固有している權力が正當なりとせられるのは、この暴力的（收奪的）機能が社會的に承認されているからである。したがつてもし特定の權力の暴力性が成立しえなくなれば、その權力の正當性もまた失われなければならない。このように權力の暴力性と正當性とは、必至的にたがいなさえあつて權力を論理的に構成しているのであるが、しかしこの權力の構造的論理は、權力の概念的分析のみからは明らかになしえないのであつて、それはすでにのべたとき、權力および權力關係の社會的基礎をなす階級的支配力、および支配關係の構造を究明することによつてのみ、はじめて可能なのである。從來の多くの權力理論が、權力の正當性と暴力性の二つのファクターを折出しながらも、それらをばらばらに並列させてとらえているのみで、相互の關連性を見つけることに失敗しているのは、一に權力の社會的階級的論理の究明を怠つてゐるからにほかならない。

權力におけるこの二つの構造的契機は、以上のごとく必至的な關連性をもつて存在しているのであるが、その關連の仕方は、電氣におけるマイナスとプラスのごとく、相互に矛盾的であつて、それぞれ逆の方向に働いてゐるのである。すなわち權力の正當性（道德性）は、その暴力性（收奪性）を、肯定しつつ否定してゐるのであつて、それはつねにそのときの權力の正當性が負荷している限界以上に、暴力性が發揮されることを拒否する。そしてそれはさらに權力の安定性を加えるためにその暴力性を減殺する方向に働こうとするが、しかしそこには自

ら限度があつて、それは決して特定權加の暴力性のすべてを、すなわちそのときの階級的收奪性の一切を否定するまでには働かない。なぜならばそれは必然的にそのときの權力を、したがつて權力における正當性をも、自殺的に否定することになるからである。このような決定的な否定は、革命的な別個の權力によつてこそはじめて可能なのである。かくていかなる有徳の君子といえども、彼が革命の側にたたないかぎり、特定權力における暴力性、すなわち特定の階級的收奪性を否定することは、絶對的に不可能であることがわかる。これに對して權力の暴力性は、支配階級の要求のままに、收奪のための露骨な力として働こうとする傾向をもつてゐる。そしてこの暴力性は、それ自身の軌道を走るのみで、自らその限界を定めることができないのであつて、それは必ずそのときの權力のもつ正當性との對抗によつて限界づけられねばならないのである。ところがその權力の正當性が相對的に弱い場合には、暴力性は易々としてその限界を突破することができ、そのときには權力はきわめて露骨に收奪的なものとなつて、それはついに人民の怨嗟をうける。そして再び權力の正當性の強化が企てられるか、あるいはそれが不可能な場合には、その權力は必至的に轉覆せしめられるのである。

かくのごとくして、權力はその構造的二契機の矛盾的緊張の上に成立するが、いうまでもなくこの緊張線は、決して一定ではない。それはあるときには暴力性の側により多く傾いて、惡政の非難をうけるかと思えば、あるときには善政の賞讃をうけるほどにまで、正當性の比重が加わる。このように特定の歴史的階級的權力は、つねにローリングしつつ、その緊張的安定位をもとめて動揺してゐるのであるが、權力のかかる性格にもとづいて、はじめてそこに政治技術の問題が成立する。すなわち古代國家の成立以來の、權力意思の決定およびその行使にかんする技術の問題は、結局、權力における構造的二契機の矛盾的相關關係に根據し、そしてこの問題は權力の暴力性と正當性との、いかなる比重關係のうゑに特定の權力の矛盾的緊張的安定を、もとめるかという點に歸

着するのである。哲人政治^{フランドリス}えの憧れも、權謀主義^{マキアベリスム}の主張も、すべてここに出でざるはない。したがって權力がもしかくのごとき構造的矛盾を固有していないとすれば、われわれが當面している政治技術の問題も、政治家の人格にかんする要求も、すべてそれ自身問題とはなりえない。なぜならばもし權力が、本質的に正當性を缺いているとすれば、その暴力性（收奪性）は無反省に發揮されうるし、逆に暴力性をもっていないとすれば、それは哲人の出現を要求しなくても、それ自體倫理的でありうる道理である。かくて政治技術の問題は、權力の矛盾的構造に、その成立の論理的基礎をもっているのであるから、この基礎構造をふかく追求することなくして、政治現象が存在するところには、當然そこに政治技術の問題が隨伴する、といった程度に問題をとどめているかぎり政治技術論を發展せしめることは不可能である。

さて、權力は、以上のような論理的構造をもつて、階級的收奪のための組織せられた強制力として働くのであるから、それは人間的自由にたいする對立者としてとらえられなければならない。歴史の國家的段階における自由とは、究極的には權力からの自由を意味するのであつて、それは決して、社會的強制力一般からの人間の自由を意味しない。すなわち、一般的には平板にも、人間が社會生活をなしている以上、多かれ少かれ自由が拘束せられる、と解せられているが、しかし人間はある場合には、自由の意識において、社會的強制を甘受し、そしてこの強制は、一般的には文明の進歩とともに深くかつ廣汎になつていく傾向がある。すなわち強制種痘をはじめ諸々の社會衛生にかんする強制、および食品・浴場・理髮等々の業務やまた交通にかんする規則等々、それらは將來新らしきものを加え、さらに細微になるとともに、その強制力は一段と強化せられるであろうが、しかしわれわれはこれらを人間的自由と自律に反するものとしてではなく、むしろ自由の意識においてこれをとらえているのである。したがつていうところの人間の自由とは、アナーキズムの主張することく、無政府の状態において

最高であるところのものではなく、むしろ逆に社會全體の共同の成長と繁榮化のためになされる強制の強化のうちにおいて約束せられるものにほかならない。そこで人間的自由に對立するものは、けつして強制力一般ではなく、その強制が、直接に強制者の、もしくはその背後にある誰かの、利益のためになされる場合、すなわち強制せられる者の犠牲を結果する場合においてのみ、その強制は、はじめて人間的自由に對立するものとなるのである。このような自由に對立する意味での社會的強制は、例外なく權力として集中的に表現せられているのであつて、もしある社會的強制が、ときの權力に反對する場合には、その強制力の存在は認められないし、また社會的諸團體（例へば營利會社）のもつ反自由的強制力も、それが權力にまで組織せられ、したがつてその強制が權力によつて容認ないし保護せられる場合においてのみ、はじめてその強制力は人間的自由に反しつつ繼續的に行使せられうるのである。そこで歴史の階級段階における人間的自由は、結局權力に對立するものとして考えられなければならないのであつて、權力と對立關係をむすばない自由は、社會的な人間的自由の問題意識の中に入り込んでこない。この意味においてすべての自由は政治的自由の問題に歸着するのである。

かくて自由の對立者としての權力は、人間的自由の増大に反比例して、それは縮減していかなければならない。したがつて人類の歴史を、自由の質的向上並にその量的擴大の過程として、あるいは社會的階級的束縛からの解放の過程としてとらえるならば、この歴史過程は、また同時に權力の縮少過程でなければならぬ。すなわちすでにふれたごとく權力を社會的強制力もしくは最高最強の強制力といった程度を理解にとどめないで、組織づけられた階級的支配力、すなわち階級的收奪のための強制力と解するかぎり、權力の縮少とは、階級的收奪性、すなわち權力の暴力性の、縮減を意味することになるのである。かくして權力の暴力性が歴史的に少くなつていくこと、すなわち人間的自由が擴大していくことは、同時に人格權の一般的確立をも意味するのであつて、それ

は地上のすべての人間が、人種性別のいかにかわらず、完全に平等の社會的條件のもとに、生活をたのしむことのできる日に向つて、たゆみなくつづけられることと即應する。そしてこの自由の擴大の最高の日、すなわち權力の暴力性が絶無となつたときにおいては、社會的強制のすべては、社會的共同の發展と繁榮のためのものすなわち強制と稱しえないところのものとなる。このときには、その社會的強制力は何等の階級性をもたず、したがつてもはや權力という表現と事實は地上から抹消されるであろうし、また自由を抑止する力のないところにおいては、自由の要求、したがつて自由の意識もまた成立の根據を失う。いいかえれば權力の滅亡の日において、人間は全き自由を獲得するのである。

かくてこのときにおいて、かつての支配階級もまたはじめて自由でありうる。支配階級にぞくする者は、勝手ができるがゆえに現象的には自由であるかのごとくであるが、本質的には權力の暴力性が存在するかぎり、彼等といえどもけつして眞に自由ではありえないのである。他人の人格權をみとめ得ないものが、自らの人格權を主張し、あるいは他人を自らの利益のために強制するものが、自分だけ自由でありうる筈がないのであつて、地上に一片だに權力の存在するかぎり、いかなる人間も社會的に自由であることはできない。

そこで自由の擴大に反比例しての權力の縮少過程は、やがて階級が消滅することく、權力の全き消滅にまでいたるのであるが、この歴史過程は、權力の制度としての、政治制度の發達過程としてあらわれる。すなわち權力は觀念的な抽象的存在ではなしに、人間の精神が肉體と不可分であるごとく、具體的な制度に媒介されてのみ存在するのであるから、この制度の發達と權力の縮少とは同時的でなければならぬ。しかして政治的自由もまた同じく政治制度を媒介として、はじめて具體的にとらえうるものであるから、政治的自由を保障する方向への政治制度の發達は、同時に權力の縮減を意味し、政治的自由の完成の瞬間において、その制度はもはや權力のた

めの制度、すなわち政治の制度というには相應しくなくなつて、別の名稱がこれに用意せられなければならない。それは人間が、少年とよぶに不適當な年齢的肉體的條件をそなえてくると、青年という呼び名に變えられると同じである。